

学校経営のポイント

“SO冬季大会・長野”を生かす

若井 彌一

去る2月26日(土)から3月5日(土)の8日間、スペシャルオリンピックス冬季世界大会が長野市等5つの市と村を会場として開催された。

SO (Special Olympics) の大会理念

オリンピックやパラリンピックに比べて、スペシャルオリンピックス (Special Olympics, 以下、SOと略) は、まだそれほど多くの人に知られた存在ではないと思われる。

この大会の理念の1つとして、「知的発達障害のあるアスリートが個々の目標と可能性に向かってベストを尽くす競技の舞台を多くの市民の積極的な参加により創りあげ、勇気、喜び、感動を分かち合い、『皆で集い、共に楽しむ』大会を目指します」というスローガンが掲げられている。ちなみに、今大会のテーマは“Let's Celebrate Together!” (皆で集い、共に楽しもう!) である。厳密な言葉の吟味はともかく、およその趣旨は十分に理解できる。

今回の長野大会については、「2005年スペシャルオリンピックス冬季世界大会は、アジアで最初に開催される世界大会であり、オリンピック、パラリンピック、スペシャルオリンピックスの3つのオリンピックが同一地域で開催される世界的に意義のある大会である」(大会理念の1つ)と述べられている。

パラリンピックと同様、今回のような世界的な規模の大会を開催するには、多くのボランティアが支えとなることが不可欠である。今大会の参加人員は、選手団が84カ国から約2,600人(アスリート約1,800人、コーチ約800人)、これに対してボランティアが約8,500人にも達する多さである。

オリンピックの際のような派手な報道はSOについては見られないが、大会の様子はほどほどに伝えられている。学校の児童・生徒は、SOの報道に

の程度の興味をもっているものであろうか。

“知的障害者の輝き”と“人々の助けあい”

パラリンピックの場合と同様、SOから児童・生徒に学びとらせたいものがある。それは、国を問わず、知的障害を有する人々が障害に屈してしまうのではなく、それぞれに前向きに人生目標を設定して、努力のある日々を送っているという事実である。

また、1つの世界的規模のスポーツ大会の開催と運営には、多くの人々の積極的な支えがあるという事実である。これらの事実を児童・生徒の興味・関心を高めるような工夫をして話題提供し、SOそれ自体についての理解を深めるとともに、1年間を回顧するにあたり、児童・生徒一人ひとりの1年間の生活をふり返らせる参考や教訓とすることができるようにしたい。

SOでは、上記のような大会理念を具体化した種目の1つとして、知的障害者と健常者がペアとして競技する「ユニファイド」と呼ばれる種目がある(ペアスケートとアイスダンスの2種目)。3月5日付『朝日新聞』は、この種目に出場した一組のペアについて生き生きと伝えている。生き生きとした内容の報道は、出場者の生きざまがそれだけ豊かなものであることによって可能である。

そのような生き方は、目標をもてずに、努力なしの、感動の伴わない生活を送っていると推認される少なからぬ児童・生徒にも十分に可能な自己挑戦であることを伝え(諭し)ていきたい。

(わかい・やいち=上越教育大学教授)

『教職研修資料』メール配信のお知らせ!

(<http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp/kenshu>)
メール配信ご希望の先生は、上記 URL をご覧ください

●新刊案内●

最新刊 好評発売中!

教育開発研究所刊

資料と5肢択一演習で把握する新年度の経営課題! 菱村幸彦【監】A5判280頁・定価2625円

教職研修'05 情報版

《座談会》義務教育費国庫負担制度のゆくえと義務教育改革
《学校の危機管理》新潟県中越地震の教訓
《5肢択一演習》資料から読みとる新年度学校経営の課題